玉の雲

三

哥を名とせり

[v.5]

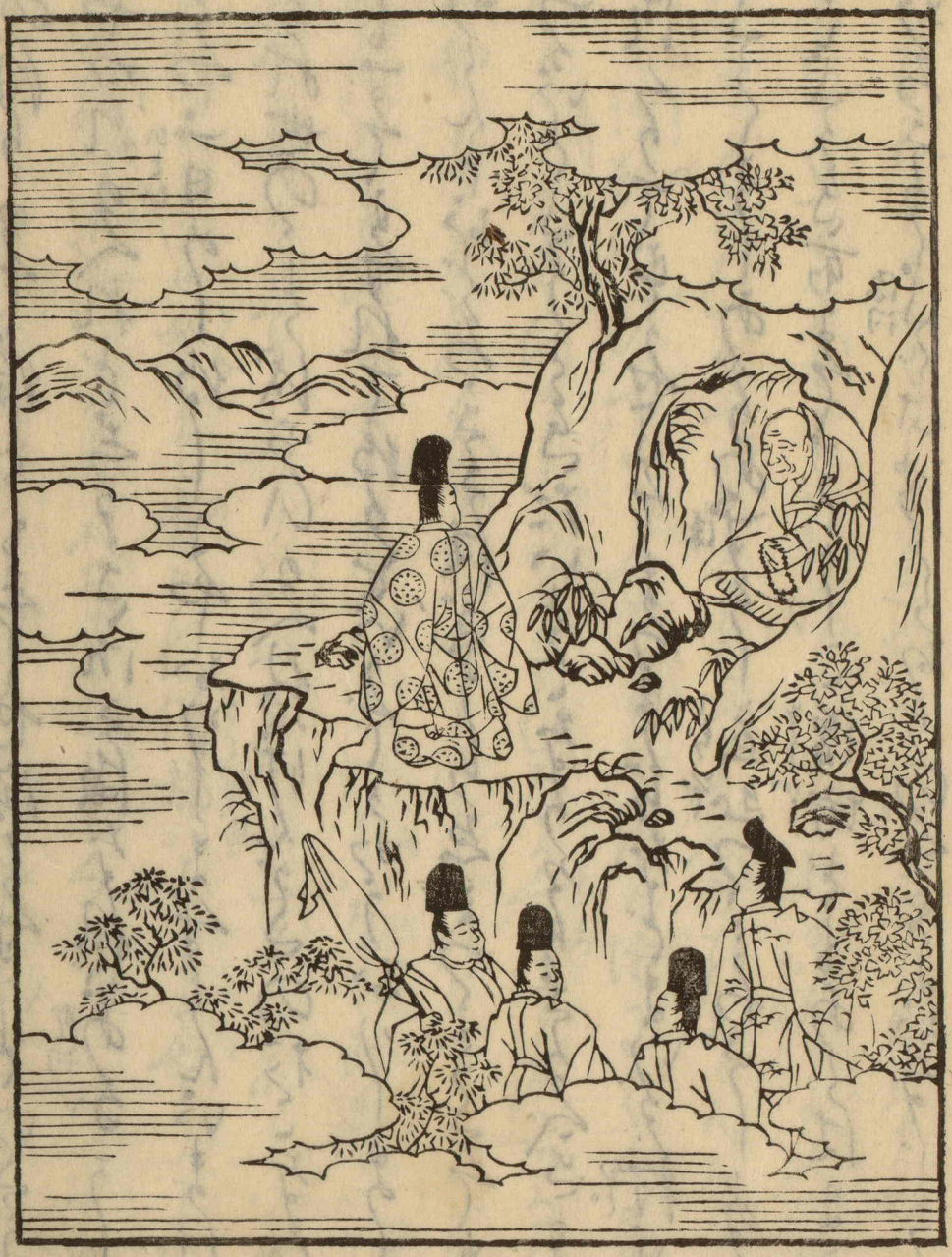
PL788
.4
.G4
1654
vol.5
copy1
Asian
Japan
Cage

2004551302

源氏十七ヶ

わらはやうにわづらひなりて、よろづにまじなひ、かぢ
などまいらせなへど、しるしなくて、あまたゝなめび
とこりなひなれば、ある人きたる山になんなるまがし
でらといふ所にかしこきをこなひ人侍、こぞの夏
もかゝるをこりて、人ごまじなひにづらひしを、やゝ
てとゞむるたづひにまた侍さ、しこうしつゝ時々
うたて侍る後、とくこそ心ゑきせ給ためなど思ひ
れば、源しにはかくしたるに、おいかぐまりて、むろの
とにもまゐでずとやられば、いかぐ、源詞をんしのび
てもれをんとのなりて、れともにむつましこさ口
五人ばかりしてまゐ曉におり寸やゝかういる所

なりそり。三月のつごもりなれば京の笠ざうり
をこれ過まなり。山のさくらはまださうりまでいり
もておもすゝまくは霞のごとずまひもおかしう
こゆれどからかりさ海もなるひ給ひず。取をされ
方までめづらしうおぼされなり。ちのさ海もいと
あはれなり。こゝはさくふるき岩のなりまぞひ
じ里いりぬらりけり



のぼりて流れともおもしせ給はず。いといかう
やつれの人れど。もちゐされさ夜なれば。あかうし
こゝや。一日めしゆしまゐおかしまゐすん。いまは
これ世のしゝはせひのみ入ればげんげのたこなすひ
もすてもすれて給るといのぞうかうおかりしまゐて
つんと。おどろきさはござうちゐさつこゝろてま
つかひとしうとききだいとこなりそうざうべきまの
あれくりてぞせるてまつりたいどもまいりる候日
ささしあづりめすこし立出つこゝわうしのみん
だらうき示まてごうりしこ僧坊どもあるはまこと
おろさうらふ。ふしけはざりありのおもおほかおおかすずこうて

ぞなれどうるさしうしわるしてさうぎなるやら
うなどつゞけてこゝちいとよしあるハなまゝ人の寸
むまゝとこひぬへバ此とも有る人これなんなま
がし僧都のこのかゝとせこまり侍る坊まもべる
なるこころもげかしき人をむなる所まこそ有れ
あやしうもあまりやいしけるれ さてもこそ
されなどのぬふさうげなるわらハなどあまた出
きてあるしてまつり並おりなどするもあらハま
ゝ程かしこゝ女こそ有れ僧都ハよもさやうまハ
すへ給りじといかなる人なるんとくらぐいふおり
てのぞくもありおかしげるる女ごども わうさ

人ぞうちくべなんこゆるといふ。君ハをこなひし給
ひつ。日たくるまゝにいかなるんとおぼしたるを。
とううまうぎらハさせ給て。おもほしいれぬるんらく
侍るときこゆ積バうしろの山にしらせて。京の
うるをこゝのふくるるまゝすこわらりて。宮司の楯そこ
ちくとなうかゝりわるれる程ど。恩にいとよくもなる
なかれ。かゝる事にすむ人心におもひのこすことも
あらじうしとのこるまへバこれもいとあさく侍り。
人のくるなどに侍るうこ山のあ積などを御らん
ぞさせて侍らバいかに御恩いうじうまうさしせ給
なん。ふじの山なまがしのぶけなどかゝりこそ

ゆかもありまゐるましのくまれおもしろきこゝらく
いそのうへをいひつゞくるもありて、よろづまま
ざらひしきる也。ちりき所にはちりまれあり
の海こそなぎことゝ侍れ、なまのいたりぬるきく
まはなれどこゝ海のおもてをゝわたしたる程ど
なん。あやしくこと所にてず。ゆ目びかなる所に
侍かれくまれさ紀のうこ。志ばちれ筆もとめりし
づきたるいへいといたしかし。犬臣の後にて、おこち
もすべかりける人の世のひがもれにて、まじらひ
もを漢、延清の平均をすてゝ、戸給をれりけるか
つきなれどかれ玉の人にもすゝしけるかづられて。

なまのめいぼくまで、文都(ミヤコ)まもりへらんといひて、
うしらもおろし侍まけるを、すこしおくまりしろ
山ずみもをで、さる海(うミ)づらまいでゐたる、ひがくしきさ
やうなれど、げまかれくまのうちまさも人のこまり
ゐぬべき所こもなりながら、ふるさとはひかく
ばなれ心すごく、わるささいしのせひまびぬべきま
より、かけ心をやわらすまゐまなん侍る、さいけ
ころまりくだりて侍しついでまなりさ海こゐへ
まよりて侍しかば、京までこそ所しぬやう女なれ、
そこらもるまいかめしうしめてつくわるさ海さ
はいへどくりのはかさまで、しをきけること

なれば。あり(ぬ)のよそひゆゑうまふべき。心がまへもま
なくしたりかり。後(のち)のよのはとめもいとゝうして。
中くほうしまさりしたる人まなんたぐりけり
と申きば。さて(源詞)それむすめとしひまふ。きし(良清詞)
ういあらず。うたち心ぐせなど侍なり。代(ざいく)とのくるの
はかさなど。よういことまさて。さる心ぐ人ゝすなれ
ど。さらるうけひかず。我身のくいるづらましげ
めるゞまある後。これ人ひとりにしてあれ。せふさ後
ことなり。もし我(それ)をくれてそれこころざしとげず。
これせひをきつるすくせなどはぐ。うゝるいりねと
つゝまゆひごんしをきて侍りなど。男ゆ様ば。(源)

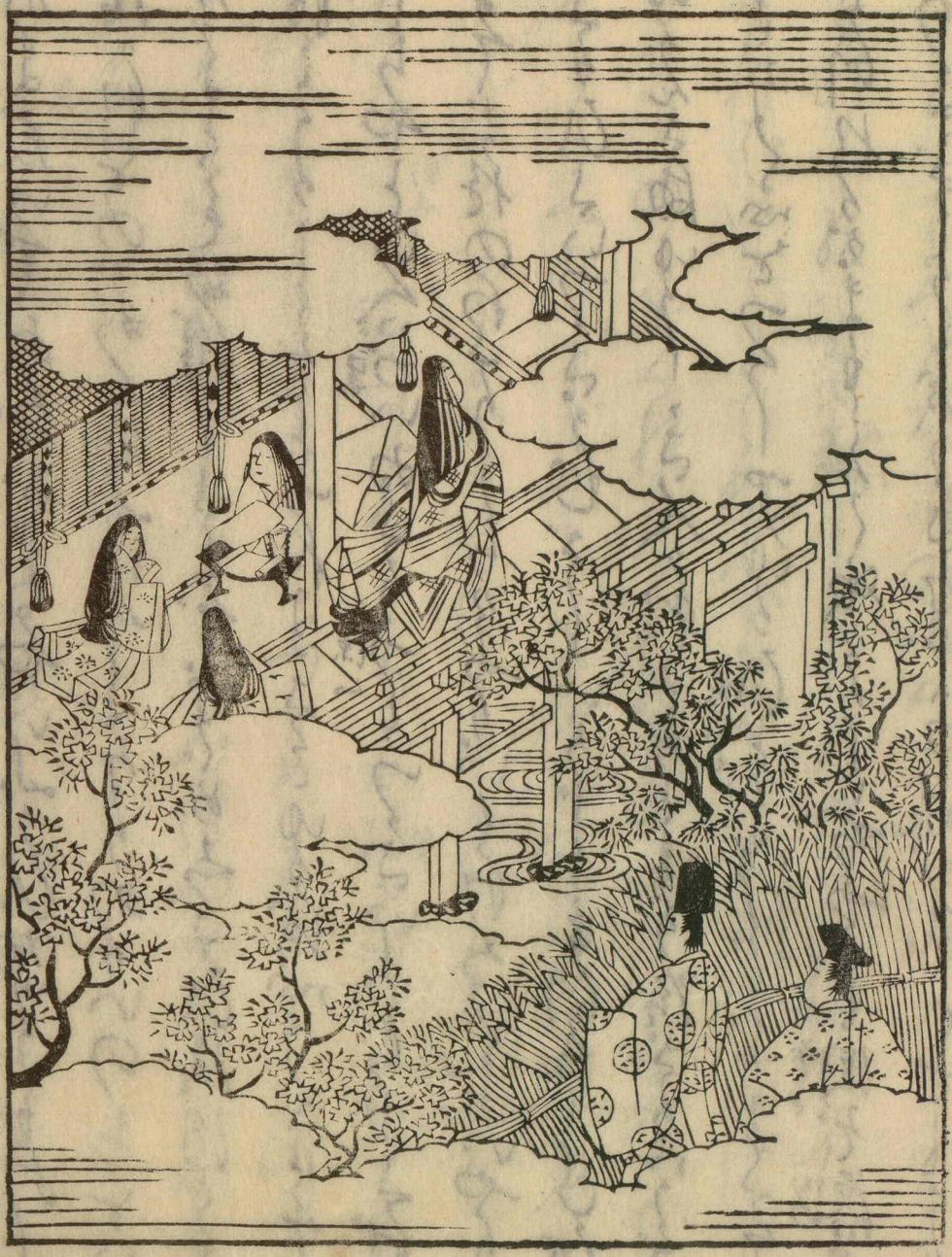
もおしとさてあふ人ごゝかいはとうわうのさゝさ
まなるべきいはさむすめなくり心ゝさくるしや
とてわらぬ。くいふにてりまれりこのこれ六人
より。こしかうかりえゝろなりなり。いとすさゝろ
ものなれば。かれ入道のゆいごんやぶりつべき心は
あらんし。さてたゞずこゝよろなるんといひあへり。
いでやさいふともおなりびゝろん。おさるくよりさ
あるおひいでゝふるめいゝろおやまのこしるがひ
ゝろんはけくこそゆへあるべかれ。よきわうど
わらはなど。都のやんごとなきところくよりあ
いまれてるゝぞ。とりて。まばゆくこそもてなす

それなさけなき人になりてゆかばさて心やすく
てしもえをきたらじをやなどいつもあり。源氏ハ
ま心にかりて海のそこまでふかうせひいるらん。そこの
みるめを抱むつしうなどの給て。たゞならずおも
ほしたりかやうにてもなべてならずまてひがこ
たらしく。これこそふ出こころなれば。出みくとゞまらん
んやとこゝろてまつる。くれかたりぬれどをこうせ
ずたりぬるまこそハあれ。もやうへしせ給
なんとある後ざいとこ出ものけなどくるくれる
さ海におかしましけるを。こゝろひハなる後ニ。いりる
うぢなどまいりていでさせまへと申す。さもあるか

こゝろなき人にすゞみもうつ擬のまことひ給ハ
ねざめすゞるおりしもさらバ朧まとのなか向も
はてなきさまうれしくなれバ夕暮のいふかりすゝ
さらるまきされるうみにしげきのまゝ立出
おもふ人ではなへしのそこれハけらうれとなる
こゝのきさゝまんへばさこそおしてあしも
おもいたへそまつてさこちふあま衣なり、すゞ
れすゝしあぢそぐされをまつめり中のはしらを
よりかゝてけうそくのうへに理をさぜていとなすや
ましげまなかねあまざむゝ人ところず、宮十バ
なりみそびともろくおてまやきまれどつゝき

かくらかは。まこのほどかこれうけくしげはそがれ
さうすゑも。中こながきさうもこゝなういまめり
しさもれかかと。衰(あれ)はこのふごさしげなりおとれ
かたり斗(ごり)。さてハわしもべぞ出入あそぶなりは。十
だりはやあらんとみしる。白きこゝあやまづきな
どのなれしるさて。りしつまさしろ女ご(紫上)あまるこゝし
つこどもまはるべくも何しぎ。いらじうおひされこ
えてうけくしげるりうちなり。うこもあつぎ
をひろぎしるやうはゆしくとしてうかもいと
あくすりなしてしそり。なまごとぞやわしりべと
はしこちしまへうとてあまぎのこあげしるは。

すこしおぼしたる事なれば、ことなめりとこそ給ふ。すぐめの
子をいぬきがおがしつる。ふせごれうちまこめたり
つるもれをとて、いとくちおしとしへり。これ居たる
おとれ、迷いの心なしのかるわざをして、さいる後
ゐくこそいとうろづさなれ。いづるへかまか
ゐぬる。いとおしうやうしくなりつるものゆゑ
すなどもとそこ川くれとて、立てゆくゆゑ
らるまいとなげくめやすきひとなめり。小納言
のめれとくぞ人いふめるし。これこのうしろみな
ゐ色し



あまぶいであるかおさるや。いふかひなうもれし
給かれ。をのがかくふふ。なすまなりぬるいのちをば
なまともおぼしたてず。すぐめしたひ給ほどよ。
はこうつことぞとつねまさこゆる。心うくとて
こちやといへば。づいぬるつらつきいとらうたげ
まてかれのわたりうちふるり。いまけるくかいやり
たるひさいつさ。かむざしいうじうまりしたび
ゆんさ。夜ゆしこさ人かれとめとまり給。さるハうぎ
アとなく心をつくし。ゆるひとる。いとようまたて
まいれるが。まもしろく。ゆるりとせつまも。涸ぞ落る。
あまにざこしうら。ゆるさなでつ。けづることをもうり

さがりたまへどおかしのけぐしやいとくらなかう
もれし給ふて衣(あれ)ようしろめたれかぐらりま
なれぐいとかくらぬ人もあるものを紫ノ母こひめぎは十二
まてとのまをくれぬしほどいらじうものいせひ
たりまへりしぞかし。たゞ今をのれまてたてま
いしがいかでよまおとせむとすらんとて。いうじく
なくをこ(添ん)ぬふもすぐろまかるし。紫おされぐうちまも
さすがまうちまもりて。おしめまなりてうけぶし
たるまうばれかりたるかみ。はやくとめぞた
うた程
尼志おひたちむありをしらぬ笑(ウタ)草(くさ)ををくら

す家(つや)ぞこさしんそしらなさまるゐらるおとれげ(お伽云)
まとう地なさて
(お伽云)さ川茅れおひ川(ゆく)末(まま)も志らぬまるいかぞか
家のさしんとすらんと(さこ)宇ゆか程ゑそうげあるる
よりこさて(俗如詞)しるるはあらそるや侍らんそふ志もけし
まおそしましけるれこのうられひじ事のるま
源氏(ゲンジ)の中将のわらはやこまじなひまもれし給
けるゆゑにいまなんこさつ事侍かいうじう志のび
給かれば元志り侍らぞこうま侍りながら此さふ
らひまもまうでざりけるとのるまへはあるいうじ(尼志詞)
やいとあや志ささ夜と人やこつらんとてすぐれ

おろしげ。この世にのくしり給ひ。ひかる源氏。かく弱
はいでまゐるてまつりたまひんや。よ代すてたる
ほうしのうちまもいうじう世のうれへもすれ。
よくひのづる人の御有き海なり。いでゝ御をうそこ
罪むとてこれをとすれば。かへりあひぬ。あくれ
なる人をこゝろかれ。かれもこれすきもれども
たゞかなりきをのこしてよくさるまじき人を
もこゝろ咎り。たまさるにち出るごとにかくしひ
のほかなることをこゝろにおかしうおぼす。さても
いとうしくしかりつゝちごかなるべきなんかれ
人の御かりは明くれのるぐさめにもこゝろやと

せふ心ゆうつきぬうらふしゐへ弱る僧都の御
でし惟光（これみつ）をよびいでさす。ほどるき前なれば、（源）君も
やがてこさ給ふ。（俗詞）よろぎりおりしましけるよし。こゝ今
なん人中すまおどろきれがしさつゝぬべき後なる
がしこれ（ちゝ）にこもり侍るとハ。しろしめしながら。
悪びさせたまへ弱をうれくしくせひゐへてなん。
人きのれむしろも。これぞうことそまうけ侍るべ
かれいとほいなきことゝ中まへり。（源詞）いぬる十よ日乃
ほどより。わらはやうまうづらひ侍をこびかさなり
てこんがうう侍れば人のとしへのまくにまくかり
こゝ身いり侍つれど。やうなる人のしるしあらは

さぬときはいしとなりべきも。こゝになりよりもいと
おしうしひまひつゝそなん。いとうしのび侍り
つゝ。いまそなるまもとのゝまへ。すかはら僧都（そうづ）
まいりしまへり。涼しなれど。いと心もづしく。
人がしもやんごとなく。せましもれまへる人なれば。
かゞくしきはなりさ夜をいしとなりおぼして。かく
こもれるほどのはもれがたりなど。ぬしまて。おなじ（僧詞）
柴（しば）のいほりなれど。すゞしすゞしきは水のたまがれも
はしんぞさせんとぞちまさしまへぞ。かれまゝ（涼）
こぬ人ごまごとくしういひこさせつる。つゝま
しうおぼせど。あくれなりつゝなりさ夜をいぶ

しらておかりしめげるいと心ぐるしうありて。
おなじ木草(くさ)ともうへなしめへり。有まさころ
なれば。やつれ氷こゞりたる火ともしどころなくも
まいりけり。これをおもていとなげけるたりしひ
あへり。ぞうずきもれ心うくありけりぞ。ごやう
そうのいそぎしとひきもしるまゝ。源のれとひりぜ
いことなれば。うちの人々も心づかひすべかめり。
そうびよみつゝたすきされ物語(ものがたり)のちの世のしくな
どまれまつせらまふ。源氏(げんじ)かつこれほどおそろしう。
あぢきなさしるゝ心とたのめて。いかくざりこれを
もひたやむべきなめり。おもて後(のち)の世のいらじ

かくべつにはおぼしでぞありやうなすゝすまゐらせ
まほしう思しめしもれうちびるの面(おもて)げころ
まうりて云しかれば・源氏まもれしてまつる
られまゐらずねてさてしまほしこさゆめどころまへ
しかれ・はふたりんせ思ひあまきつゝとききてのへば・
侍うちかはしてひとつけたまつれ夏がうりまぞ御
かゞ君させかのても・はころをとりをさせかぬべし・
故按察大納言(こあぜちのだいなごん)はかくなくて久しく成侍ぬれば・
えしろしめさじうし・それ木のたなんなかまゞし
がいもうちまで侍りけれあざちかくれて後世をたのむ
ことそ行ひつれ。じゆかづらふことはまゐらうく

京にもまうでねどもみもしどころこそなくて
まよひ給ひけり。かの大納言のむすめ
ぬしのすまゐへしはずかしくおもふ
にはあらで。よめやうはあすゆかなりとぞしあては
のこまへど。むすめさえひとり給ひしをさて二十よ
年までなり給ひぬらん。故大納言はうちまさりてまいれ
らんなどいひしに。いつき給ひしとぞみはいのごとく
もまよひ給ひてすぎ給ひしば。さしあまりさま
ひとりなてあけみひ給ひしほどまいらする人のし
わざなり。無量の家なんどのひてかへりつき給
へりける。かくれなのこと御心どうつくしげなく

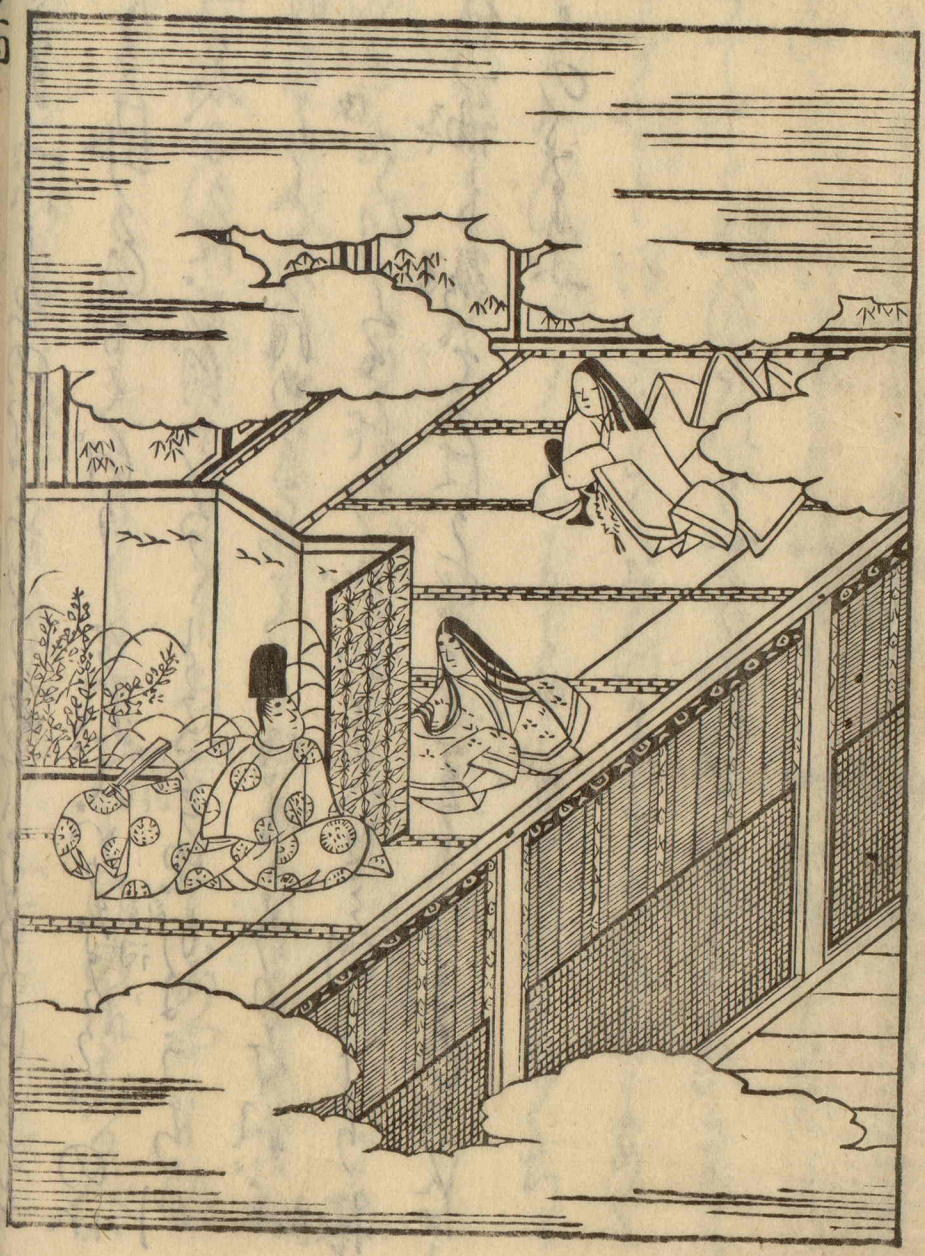
やすらぬことおほくて。あけくれ抱をさひてなん
なく奴侍(なりたべり)にし。抱さひにやまひづく抱と。めにちか
くこゝにへしなどやまふ。さしば(源ん)それこなりけりと
おぼし。ゆくをれ。こゝにれすぢにて。かれ人にも
かゝひこそてこゝにやと。いとゞあはれにこゝまほ
しく。人の程(ほど)もあてにおかしう。中くのさしら
心なくうちかたらひて。心のまゝにをしへおほし
たてこゝばやとおぼす。いと(源詞)哀(あれ)に抱しこゝまふこと
かれ。それにとゞめ給ひてこゝもなきかと。おされかり
つゝゆく濡(ぬ)のなをこしかにしらまほしくて。どひ
にへば。なく(僧詞)なり侍し。ほどにこそ侍しが。それも

女まてぞ。うれまつきてもれせひのもよほしまな
ん。よくひのすゑにおもひこまへなげき侍めると
きてしあ。されば（源ん）よとおぼさる。あや（源詞）しきことなれ
ど。おさるまきけうしろこるおもほすべく（きこ）罪を給て
んや。ふふ心なりてゆきうくづふうこも侍りながら
世る心のしまめにやあらん。ひとりずゝまてのこな
ん。まゝにまげなきほどく。つれの人におぼしなずらん
て。たしこるくやなどのまへば。いと（俗詞）うれしうるべさ
おほさゞとなるほまゝむげにいたけなきほどに
侍めれば。こゝふれまてもけらんじがらくや。そも
く女も人にもてなされこる。おとれにもなり

絵もれなれば、くりしくハえとりやさず。それをぞ小の
うるかうしひ侍て男させんと。すくよりまいひ
て。もれこそさき夜しまへれば。わかき法心まもげ
りしてえよくも男を絵ぬ。あえぬ佛もれし
絵ぞうは。すること侍るころはなん。そやいまぶつと
め侍らず。すぐしてさふらりんとてのぼりまぬ。男は
心ちもいとなやましきは。夜すがしうちそこき。山
風ひやくるまふきたるは。腕のよどみもまきりて。老
さらく男ゆ。すがしねぶるげなるど。腫のしくしぐす
ごくさてゆるなど。すぐろなるひともとろうら
もれ衰なりまして。母もほしめぐらすことも母

くてまどろまれぬぞそやといひしかども夜
もいたうふけはてうつ伏まも人のねぬけはひしに
くていと思(しの)びられどずぐのけうそくはひきるる
さるをとと同のきてなりしうふちそよめく
ととなひ何てくるなりと思ひて程もなくちか
かれがとはしてわたしたる屏風(びやうぶ)の中をすかし
ひきあけてあふぎ(ぎ)なしまへば(内ノ女)お同くるさ
ろうちすべかめれどきてしらぬやうにとてゐ
さり出るひとあるりすかしたぞきてあやしひが
みくるやとしどうをきてまて同(添羽)とけの中たるべ
くらきまつりてもさらにしぶまじかなるものとと

のこまふ。はこ恩のいとわうあてなるよ。う（内ノ女）はいで
んこはづかひもたげりしなれど。いかなるかたこの御
しるべにかは。おぼつかなくとさたゆ。げにうち（源詞）
けなりと。おぼめき給たんもことわりなれど
（源）たけくされわの紫（ぞ）のうへをこいるより猿（玄）
ねの袖（そで）も露（つゆ）ぞかはか恩。とさたしこまひてんや
とのこまふ



内ノ女詞
さらまかやうの御をうそこうけまりわくべき人
もくのし給ひぬさ後ハ志ろしめしたりげなる後
これまかハとさらも。を原詞のげからさるやうなりうる
ゆゑゆゑなしんと。さひなしまへかしとのまへだ。
内ノ女
いりてこさらゆ。何ないまあかし。これ志や。よづいたる
ほどにおもす事とぞおぼすらん。さるまてハこれ
わかくさ後。いかでさいまへることぞとさ後ぐ
あやしさる。心もこゝろぞれて。ひさしうなれだ
なさけなしとそ申
尼
まくらゆふしよひづりの家けさ後こやまの
こけまくらべざしなん。ひがこう侍り物をとさて

給。(源司)やうのはてなりれせうそこはまぐさしる
こさてしたしぎなしもぬことなんかうじけるく
ともかうついでにまゐくしうこさてしさす
べきことなんとこさてしまへれば。このまぎひがことき
こさまへ家なしんと。いとしげりしきれなるひに。
なまごとをかはいしへこさてんとのまへばたしこ
なうまとておほをと人ぞ罪ゆ。げ(尾宗司)にわかやかなる
ひとこそうこそまあしめまめやかなのまふかうじ
けなしとてゐさりよりまへり。うち(源司)つ年ア
あさしかなりとれらんぞられぬべきついでなれど。
こまはさもおぼし侍しれば。伝(かとけ)はをれげりとて。

おとれくしうくげうしげなるまつまれて。と
こゝもえうち出ありぬ。げ尾詞はせひまへよりがこさ
ついでにかくまでのこ海をこさてしさすなを。
つきくはいつぐとのまふ。あくれにうけ給ける。
紫 つりさ海をかれすぐさまひにけん。たりにおぼし
ないてんや。いふかひなき程のよくひにて。むつまし
かるべき人にもこちをくれ給ふれば。あやしう
うさこるやうにて。年月をしてかさね給れ。おなじ
さ海にもれし給なるを。こぐひになさせこまへと。
いとこさてしまほしこさ。かうおりもつりがこくて
なん。おぼされん可をもくぐうしぬ。うち出給りぬる

とこさてしまへば、いとうれしう心ひとまへぬべき
れことながらも、こゝろしめしひがめたることなどや
侍らんとつましうなん。あやしこさ男ひとけ
とこれもしべまする人なん侍れど、いとまぶいふ
ひなきほどまて、ゆらんしじゆうさうしも侍
まがるかれば、えなんうけまくりとゞめられざり
けるとのまふ。これおぼつかなかしぎうなまくる
ものは、ところをうおぼしくゞうしで、おもひまへ
よりさ海ことなる心のほどをゆらんぎよとこゝろ
まへど、いとまげなきことをさもしらでのこまふと
おぼして、心とけたれいらへもなし。僧都おくし

ホ十八

ぬれば（源詞）よりしかう罪（きこ）しそめ侍ぬれば、いとゝこのもし
うなんとそ、そしたて給川、曉（地）がるゝ、ゆゑなれば、法花（かつけ）
三昧（ざんまい）をこなふぶうの懺法（せんぼう）のしるし、山おろしにつさ
そ罪（つみ）しくろ、いとゝうとくたされ、者（をこ）にひゞさ侍ひたり
（源）ふきまよふ山をろしに夏（ゆめ）さめて、用（なぎ）もま
ほすゝさのをとれ
（源偏節）さしぐ（浸）ゝに袖（そで）ぬしけり山水にすめる心は
さいざやハすゝみくなれ侍ましやとこさてしのふ
明（あけ）ゆく雲（そら）ハいとゝいたう霞（かすみ）て、山のとりすもそこハ
しとなくさしづりたひたり、岩（な）も志しぬ末（きく）草の花（こな）
どもなくにちりまじつゝ、ましきに志けりとゝゆり

まゐれたゞずこうりくもめづらしくこゝのふに
なやましさもまぎれてぬ。ひじ望うづきもえ
きねどやうくしてごしんまいらせ給。かれこゝ急
のいというすきひがあるもあれはくうづきて
ごしまよみたり。此世人の人どまいりて。そこたり
のへるよろしびこさしうちよりも此ほうひあるも。
そうげよりこゝしぬさ夜のはくぶもれなまくれと。
たまのそこまでほりいでいとなこさしてのふ。て 傍詞
こしぢうりのちうひふうう侍て。此とくりにもえ
まいり侍るまじこさしと。中くにもせひのへらべき
かなたまどこさしてのて。お目こさまいり給。山 原詞 あるに

こころとまり侍ぬれど内(清)よりおぼつかなからせ
たまへるもうしこゝれば なんいまこれもれのおり
すぐさずまいりたん
(源)こやぐにゆきてうちたん山(ぎゝ)楊かどよりさきに
きてもみるべくとのまふ御もてなしことづかひ
さへめもあやなるに
(僧)うどんげの(ちな)花まちしたる心ちしてこやさ
(ぎゝ)楊に先にそうつたれど(きこ)実なへば(源)ほく思ふてどき(詞)
なりてひとしたび聞しくなるいかなるかもれをと
のまふひじつ御かくしけ御いりそ
(聖)おく山の松のとぢそをまれに何かてまぐこ

ぬそれのかほをうかれとうちなさてえたて
まいる。ひじ里出海もりまとことてまいる。僧都
聖徳太子のくらくらよりえまへりけるこんがうじ
のずゞのこ海のさうぞくしたるやがてそれくり
よりいれたるさんかしらめいたるをすさたるふくろ
まいれて。文紫の枝につけて。むん尋りのつがぜに
出くすりどもいれて。荷さつたなどにつけて。さらに
につけたる出をつりもれどもさくぞしてまいる
里たまふ

源地 まんはひじ里よりつじめど經(きやう)をつゝほうしのかきだ。
まうけのものども。さ海ぐまとりまはうちしたり
かれば。それわたりのやまがけまでざるべきわども
たまひ。ゆ(ミ)ず經(きやう)などして出給うちまそうげへまて
かれこさて給しことまるびこさてしまへだ。尾訂 ども
かうもたゞいまいこさてたんうるなし。もしれこう給
ざしたりは今(いま)四五年をすぐしてこそいともうく
もとのまへぐ。ざ(俗)なんとおれじ。さ海まのこある時。
源 ほいなしとおぼす。れをうそこそうげのもとか
ふちいさきわらうしそ。
源 夕月ぐれほのかに菌(くな)の色(いろ)をそてけさい 霞(かすみ)

のこちぞわづらふ御返し

尼 海ことまや茶れあるりはこちうさとうす
ける鬼の事変をもらんとよりしあるてのいとなて
なるをうちすてかいこまへり御車まるてまいる程
大殿(左大臣)よりいげちともなくておりしまりにけること
とて御むかへの人ぐ云迷などなまるに乗りかへり
駅中将左中弁(とうのちうじやうさちうべん)さらぬ君ぐちもしてひ男たてかう
やうの御ともはつかうまつり給らんとおもひかまふ
とあさましくとくらさせかへることく根きえて
いというじき茶のけに思ひしもやすらかず立
かへり給らんはあらぬわざかれとのかふいとしづる

れの苔のうへになまゝねてかけらけまいつおちくる
水のさ海などゆへあり澁のもと也。江中将ふとゝろ
なりけり笛とり出てふきすましたり。弁の君扇
くらなりうちなしして。とゝろの寺のしなり
やとうしふ。へりいことなる君ごちなるを。源氏のき
ミいてくうちなやこそ。岩によりゐしまへ。なは
しづひるくゆしきはなりさ海にぞなるごとに
もめうけるまじかりけり。例のひちりとさゝくずい
ぜん。さうのあしもせしうすきれなどあり。僧
都さんをこげうしもてまいりて。これしてはて
ひとりあそぶしておれじくは山のとりもれ

どろかしゆらんとぞちまきてしまへばこゝぞり
ごちいとしへがこゝきものをとゝてしまへど
けまくかゝずかきなましてこれこちまひ始
あらずくちおしといふかひなきゆうしまらべ
もなまゝをおとしあへりおしてうちまは年おい
こゝあまごさゝこちなどさらまかゝ人のれあり
さ夜をこゝぎりつれがこの世のものともおぼし給
しずとゝてしあへりそうげもあられたまゝ乃
ちぎりまてかゝれさ夜なりかゝいとむけかしさ
日のもとのすゑのまゝむまれまへらんとこゝる
いとなむかるしきとてめをしのごひ給このわ

君おさかごろにめでたき人かれとこまひて、宇(ミヤ)の御
行りさ後よりもまさりまゐるかれなどの給。(内女詞)さらば
かれ人の御こゝに(なり)ぬておかしませよとこゝこゆれど。
(紫)うちうかづきていとようありなんとおぼしたり。
ひゐかあそびにも思ひいまつにも源氏のきこと
つくり出てこゝよしなるさぬきせうしづきまゐ。(源)君ハ
まづ内(御門)にまいりまてひごろの御物語(がたり)などいまし(きこ)ま。
(御門)いといたうおとろへにかりとて。ゆくしとおぼし
めしたり。ひじりものたうとかりけることなどとゝせ
たまふ。(源)くくしく奏(そう)しまへば。(御門)あざりなどにもなり
ぐきまれまとてあめれ。(源詞)ぞこなひのらうにつもりて。

おほやけまゐらしめされざりけることくらうしと
がりの給ふをかり。おほ（左大臣）とのまゐりあひまて。れむ（左大臣詞）
へまもとせひまつれど。しのびこゝ。れ（三）ありされ
いりどとせひさゞりてなん。のどやかり。一二日
うちやすみまへとて。やがて。れをとりつゝふまつる
んとゝまへだ。さし（源）もおぼさねどひかされてまゐ
てこまふ。ゆが。れ（三）車（くるま）まのせこてまゐりまゐる。身
づからひきいりてこそまゐれり。もてかしづき
きこえまへる。れ（三）心ざしへのあふれなるをぞ。さ（源）すがま
心ざましくおもほしけり。夜（よ）まもおかしますらんと
心づかひしまて。久しくこゝまゐぬほどいとゞ

まのうてなまこぐきしけらひどろげとこのへ
こまへり。女（菱）ぞれいのくいりくれてとみまもいぞ給
くめと。おしぐ（た太白）をちまこそしまてからうしてやうり
まへり。こぐ思まうきこうもれひめぎこのやうま
しすへられてうちこじろき給こともうくう。
りしうてものしこまへば。おもふこともうちうすめ。
やまうちの物語（ものぐち）をもこそこんまいふりひあまて
おりしうさまちいくへこまけぐこそ何くれなくめ。世
まは心もとけずうとくてげしこそもれまおもほし
て。どしのうさなるまそへて。れこころのへどても雨
さるをいとくるしく。思ひずまとさぐくそよれ

つねなる御[ミ]筆[ケ]気[き]をこぞやこんがうまげしひ物
しともいかぐとぞまとらせしまもぬこそめげ
らしかるぬことなれどなをとうしめしうと[きこ]男[ゆ]あ
ふがらうしてとゝぬ[菱河]いつきもれまやあらんと
ありめまこをとせもへるまみいとくげうしげま
けるかううけくしげなる御かるちなり[源河]まれくハ
あさましの御ことやとはぬいなどいふこそくこと
まこそ物なれ心うくもの給なするかよと[とも]其ま
つしるさ御もてなしをもしおぼしなをるおり
もやとぞさ海かうぞ海ま心こ[きこ]男ゆるをいとぐおも
ほしうとむなありかしよしやいのちぞまとてよ

なのおもしまへのあぬ。女ぎんふかこもいりのうぎ四九
わづらひのてうちなげきてふしのへるもなまに
つきなきまやあらん。ねつるげにもてなして。とり
う世をおぼしうごくことおほかり。れわうさの
おひいぞんほどのなをゆしきほ。まげるきほどし
ふへりしもことよりぞうし。いひよりぐうきこと
にもあるかいうまうまへてこぐころやすくむかん
とりて。あけくれのなぐさめにもらん。兵部の気ハ
いとあてになまめいのへれど。まほひやうなども
あらぬを。いうでうれ一ぞうに覚しのつん。ひとり
ささいぢらなれバにやなどおもほす。ゆかりいと

むつましきまいらでしとゝかうおもほせ文の日は文
とてまゐれおゝり僧都(そうづ)にもほのめかしまゐべし
なまうへにはまてくたれとりしはなしきれはく
ましさまおもひおゝるさ海ともえあらりしくて分
らずたりしとなんぐらりきこゆるにてもとし
なべこゝぬ心ざしのほどをはらんじたらばいかに
うれしうなどありなりまちいさくひらき結て
面(係なり)かげハ身(こ)をもたなれず山猿(ざくら)心のうざりとめ
てうしらどれまれ風もうしろめたくなんとあ
はてなどハさるまれにてこゝにくるくをしつゝこ
めへるさ海もさぶすぎしろは笑どもにはめもあや

まことのまうしこれはおはかりしつてや。うつくしき
えんとおぼしまどふ。ゆくへの心もとなさに
さりのまもおもひのへかまれしぞ。ありさへさせし御
つくまふこうしさきんくまつらんぎまうしおまりばを
じをまかりしくしつづけてへしざあれにかひなく
おんざても
あしかてこの人の播ちしめまゐらせんと思ん
けりほどのつるきぞうしろめたうとあり。
さうばの心へりもおろしき御なれば、うちおし
くて二三日ありて惟光をぞまゐらせたまふ。少納言の
めのとりふ人あひしらひてくはしく

らんなどの給ひしす。さもらしぬ人間なりき。此心ろ
れ。ぢぢりいたけなげなりしけりひをまほなる
ねどもうしほどを。おもひやるもおりしわざとりう
此ふこあるを。僧都もうしこまりきてあ。お納言
をうそこ志てあひたり。くりしくおもほしの給さ
ま。おほりこの此ありさ間などうたり。ことばおかり
人まてつさぐ志ういひつゞくれど。いとまりなき
此ほど後。いりまおぼしてかくゆくしうなん。雅も
これもおぼしけり。此るみまもいとねんごろまうい
あてかれ此たれちぐさなん。なほこあんまほしき
とて。れいの中なるまは

あさくら山あさくも人をおもはぬになど山のゐ
のかけはなるらん御かへし
くみそめてくやしときゝし山の井のあ
さきながらやかげをみすべき これみつもおなじことを
きこゆ。なやみ給ふれわづらひのすこしよろしからんこ
ろすぐして京の殿にわたりたまひてなんきこえ
さすべきとあるを心もとなくおぼす。ふぢつぼの
宮なやみ給ふことありてまかで給へり。うへのおぼ
つかながりなげきゝこえ給ふ御けしきもいといと
おしうみたてまつりながらかゝるおりだにと心も
あくがれまどひていづくにも〱まうで給はず。内

まても罡(さと)まてもひるハつくぐとなげめくして
ゐるれハまう命婦(えやうぶ)をせめありきこまふいうくこ
ぞうるもけん(添ん)いとわりなくてこゝてまつるほど
さへうけゝとはおぼしぬぞまびしきや(安つかん)安もあさ
ましかりしをおぼし出るごとまとくもれ此地ひ
なるはざてごるやこなんとふるう(おが)覚しこるるいと(添ん)
心うくていうじきに(こけしき)事気なるもれりしなりし
うちうしげまさりとてうちとけず心ふるうくげり
しげるるにもてなしなどのなを人にさせまもぬ
をなどうなれめなることごとまうちまじつ給はざり
けんとうしうさへぞおぼさるくなまごとをうは罡(きこ)

てしのまんらふの山にやどりもとしまほし
げなれどあやまくなりこじか夜にて、ぬきましこ申こせ
源 こてもまこ遊夜まれなり夢のうちにやがて
まぶらる戦力ともがれ、とむきかへしせのさ海も
さすがにいこじかれど
世がたりに人やつくんこぶひちくうき男
をきめぬ夢になしてもおもほしこぶれたりさ海
もいとことくりまうこじけるし、命婦の君ぞ、此
なをしなしどいりきあいめもてこそたり

と(添)れまおりしてなきまゝまゝしつゝし給門にふゝ
なども(落ハ)れいの御ふんにいれぬよしのゝあれば(添ん)つれ
のことなどこもつゝういこじうおもほしほれて
うちへもまつして二三日こもりおこすれば(ま)るいうるち
まゝと(添門ノ)御こゝろうごゝろをおべかあるも(添ん)おそろしう
のゝおもほし給(落ん)こやもなまをいとこゝろうきゆなり
なりとおぼしなげくまなやましさもまきりおて
とくまいりおべき御つゝひしきれどおもほしも
しこずまことまに心ちれいのやうにもおりしまさ
ぬはいかなるまゝと人しれずおぼしてことをなりけ
れば(こ)ゝろうくいるゝんとのゝおぼしこゝろあつ

こさほどいいとぐおうさもあがりかつ。こゝ(懐姫と)こさまるり
かへがいとしるさかどまて。人ごゝろてまつりとが
はるゝ。あさましきはすくれほど心うし。人はしひ
らぬことなれば。これ母までそうをさせ給はざり
けることくおどろきつかね。わがはこころひとりまれ
しるうおぼしわくこともありけり。はゆどれなど
まもしるしうつうまつりて。何しものはこ(けしき)事をも
しるくらなりしれり。はめれとごれ弁(べんのミヤウ)命婦などぞ
あやしとしへどかゝるまいひあるすべきにあらし
ねばなれのがれがたうけれはすくをとぞ。命婦
もあさましとしふ。うち(内裏)にはれもれけのま

じられまて。どこまでしらうおりしまし。けるやう
ようぞ。やうしけるし。これ人もされこおもひなり。
いとゞ衰(あれ)はかぐりなりおぼされて。はつるひなどの
ひまなきもそらおそろしう。ものはおもはぬ
こと陳(いま)なし。伊(係)物の恵もおどろくしう。さ海こしなる
が夢(ゆめ)をこゑてあくすりもれとめしてとりをおへ。
とよびなう見(おぼ)しもかけぬすぢのことを何りをなり。
それなりまゝぞひめ。けりて。てしまをおふべ事
こしなん。何といふ。わづらりしく見(おぼ)して。ぞ(係詞)ぐりら
のゆめにはあらず。人の所こしはかろうなり。此ゆゑん
おふまゝぞ。まゝひとしまゝ。ぶなとのまてこゝろの

うちなれ。いかなることなんとおぼしわるるに。
これ宴(なし)の作ことさてまひて。もしさるやうもやと
おぼしあるをまふまいとぐ。たくいうじきこと
の楽(ん)をはくしきうしうまへど。命婦(ミやうぶ)もしふまいと
むくつけうわづらひしさまさりてざらまうぐらう
べきうなし。そうるさひとくぐりの作ぬりのる
まさうおまりしもたしてまうり。七月(ふつき)(なし)まなりてぞ
まいりまけり。めづらしうあられまて。いとぐしき
作おもひのほどうざりなし。すくしふつらうまなり
まてうちなやこおもやをまへるぞうげまふりもの
なくめでたし。れいの明(あけ)言(くれ)こうまうまのこおりしまし

て此あそびもやうくおしさころなれば源氏乃
君もいとまるくめしまひしつ此ことふえなど
さ海ぐまつうまつるをまふ。いうじうつこのへど。
志のびがたきはしされもり出るおりく。家も
さすがなることがらをとおほくおぼしつゞ年
なりかれやまでらの人ハよろしう奴ていで給ま
はり。京の此すこうらづひて。どうさぐの此せうそこ
などありおるじさ海まのこあるもことわりなる。
これ月ごろ無おもしてりまさるもれ也ひま
ことくなくて迎り。秋の末つゝ。いともれこころ
ぼそくてなげきなふ。月のおしさ夜。志のびたる

所まかりしてせひ立のへるをしぐれめいて
うちそくおもしする所へ六条京極わたりまて内
よりなれば、すこし程とをき心ちするに、何れたる
家のこぶちいともれかりて、こぐらうそしたる所
例のはともまことなれぬこれ、こゝ何なん、右接家の
大納言の家に侍り、一日もれたるまとふひて
侍しかば、かれあまうへいたりよりのまとれば、なる
ごともあばしずとなんとて侍しとこそゆれば、
あくれのことやとふふべかりけるに、なとどかされ
んともれをざりしいりてをうそこをよとの
のへば、人いれてあかいをさす、わざとかくたちより

あへることくいはをこれぞいりてうくれとふしひ
まなんおりしましうるといふ。おどろきて（尼内女）いと（詞）
うくえらいさきことれ。この日ごろむげにいとさ
のもしげるくなりせまひにこれぞ。れしいめん
などもあるまじといへども。ゆ色しこそまり
らんとおしこしとて。みなきれひさしひきつくろ
ひていれこそまつ。いとむつしげに侍れど。うしこ
まりとぶにとてなん。ゆくりなうもれふるさおま
し所（どら）になんとゆる。げにかゝる所（ぶん）にいにこぶひて
おぼさう。つね（詞）にさひ。あへこちなうしゆひなきさ海
にのこもてなきせ給（まふ）につくまれ侍（しぐら）てなん。なやませ

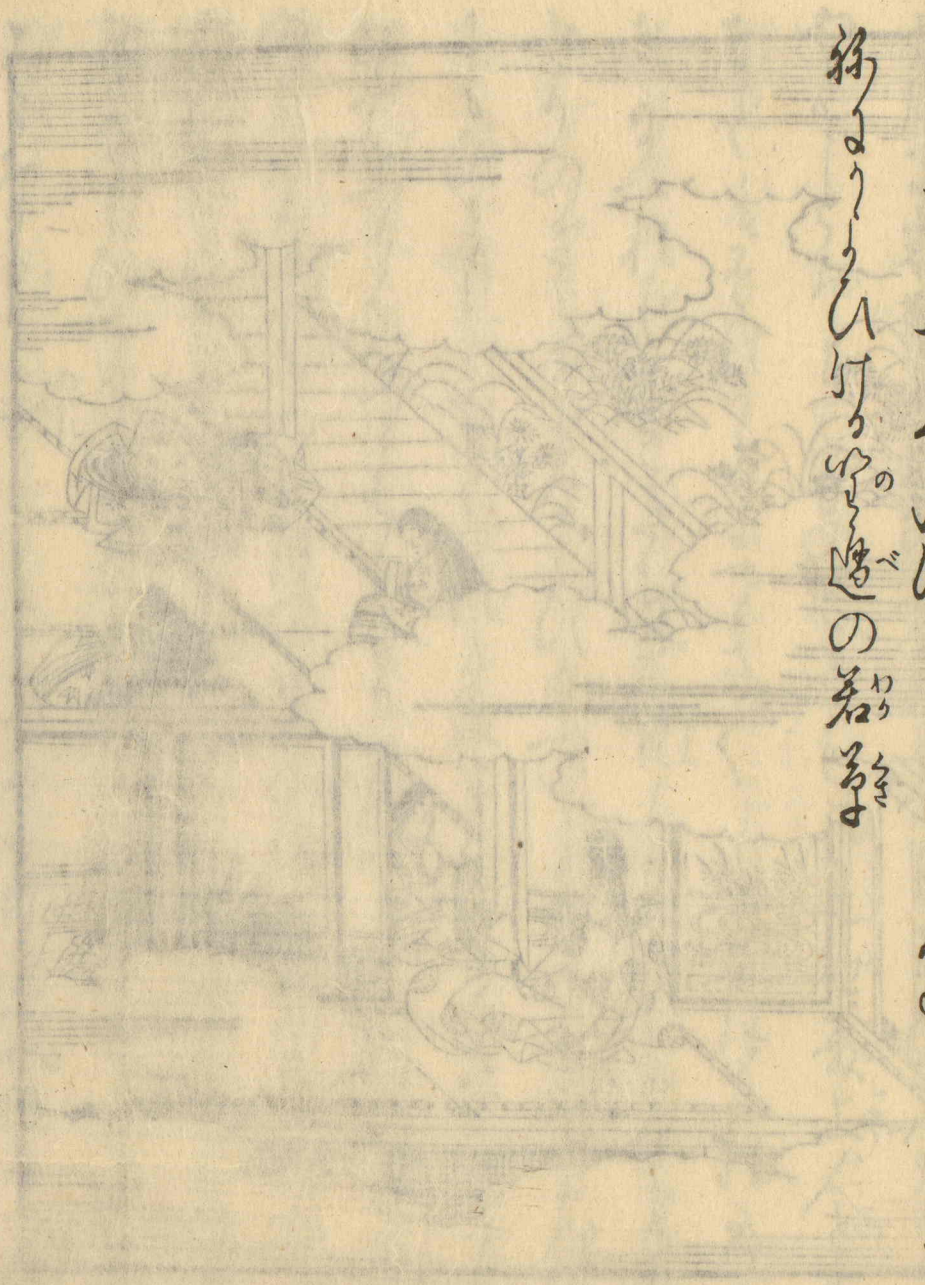
給しとともかくともうけしまいらざりけり。おぼほ
なきなどこそしかふ。尼訶ぐりぐりハいけともなく
のみえべる。かぐりの二面まなり給て。いとうたゞけ
なくこちらせかへるまゝ。ゑげうら罪しさまぬこと。
のかつすうことのすぢ。二面さうまもおもほしめし
かたらぬやう給ふバ。かくわりなきまゝひすぐ給て。
かなうずかずまへさせたまへ。いうじく心ぼそげま
ゑまへとくなん。ひがひ給ふちの御ぐしは思たまへ
られぬべきなど罪しかへり。いとちかれぐこゝろ
ぼそげるかれと思たしぐこそして。いとうたゞけ
なきわざまも給かれ。この業ぐまかしこまりも罪し

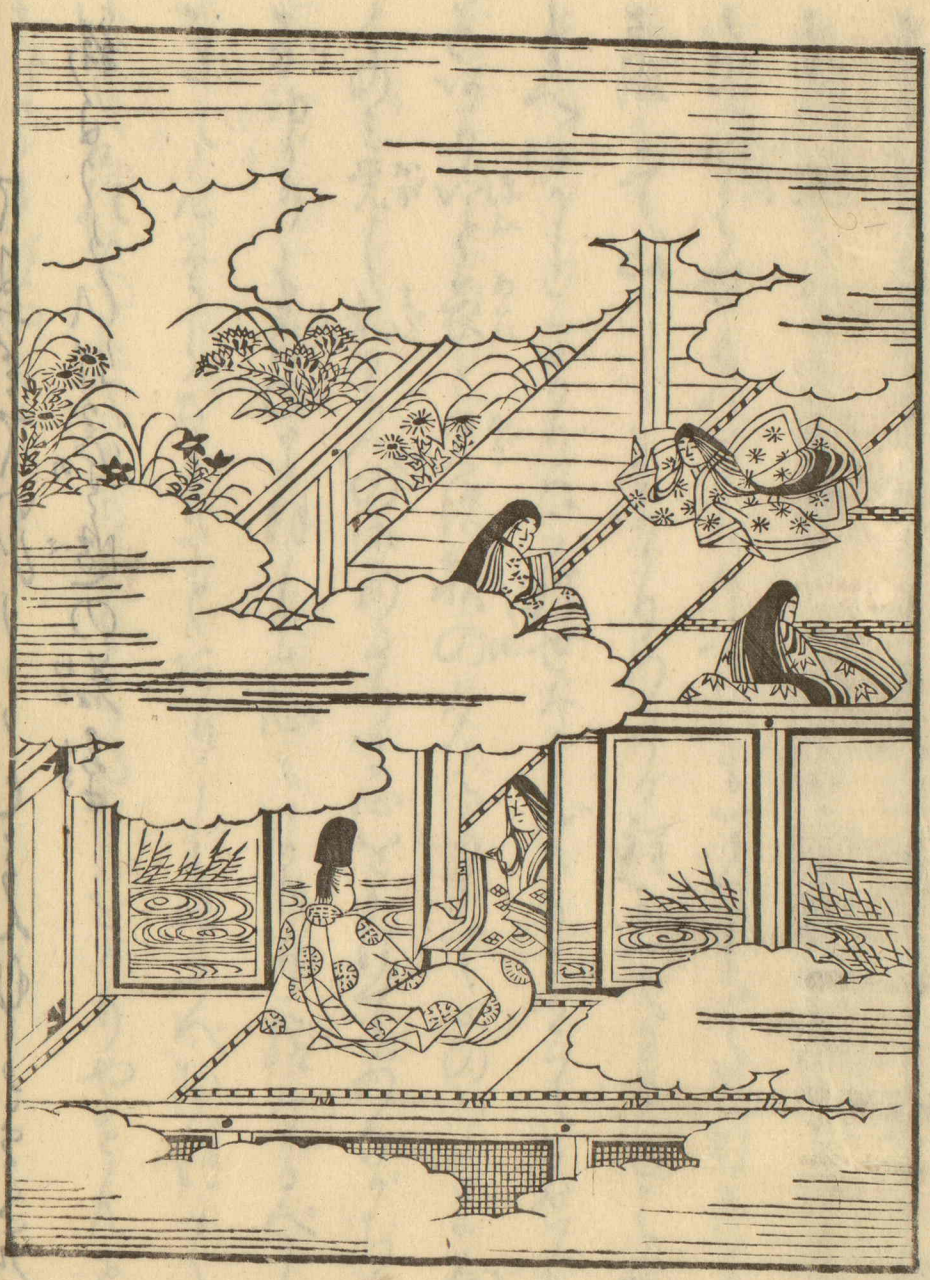
なひ何べきなどなしまいしがどのなふ。あ(添)くれは
ことなて。なすふかあきくせひ給へんことゆへかう
すきぐ志ささ海をしてまつらん。いかなる契(ちきり)は
うらこそまつりそめしかり。哀(あれ)にせひきこゆるも
あやしきまで。此世のことにはおぼし給らぬなど
のなてかひなきさ心ちのミし侍をかれいそ(紫)けなう
もれしきまふ御ひとゝ思いつでかとのなへ。いづる(内女)
やよろ何おもほし志らぬさ海におほとのごもり
いりてなど寝(きこ)ゆかおり志もあるこよりくるをと
してうへ(紫訂)こそこれ寺(てら)になりしげんじの君(きこ)こそ
おかしきなれ。なすどこ給(まゐ)らぬとのなふと。人ぐいと

かるけらいうしとせひて。けかかまとこさしも。いさミ
しかば。心ちのあしさなぐさめきとのましかば
ぞうしとうしろきこときてしらりとおぼしての
まふ。いとおかしときてまへど。人ぐのくるしと思ひ
これだ。きうぬやうまて。まめやかなすれとふらひを
きてしをきまてかへりまひぬ。げまいふかひなのか
もひや。さりともいとようをしへてんとおぼす。又の
日もいとまめやかまとふらひきてし給。例のちい
さくて
いたけなきこげのひとこ思きてしよりあ
しまなすづむ毎ぞえなるぬ。おるじ人まやとと

さらおさるくりきなしまへるもいうじうおかしげ
なれバやがてはて手ほんまと人ぞ男也か納云ぞ男し
ける。夕ノ詞ちゝせまへるはそふ波もすぐしがこげなる
夜まで山でらまゝりわるゝ程まで。かうとゝせ
まへるかしこまりハこれ世なしでもきてしさせん
とゆり。いと衰と荒須秋の夕もまして心のいとまな
くのゝ荒し乱て人のはあるりま心をかけてあかがちな
かゆりも郡ゆまほしき心もまさり給なるべし。
きゝんそうなきとなりしゆゑべおぼし
いでられて。しひしくもまゐ。ミバをとりやとんと。
さすがまあやうし

てまつこていひしかもこんむらさき乃
称まうらひけるゆの遇(べ)の若(わか)草(くき)





十月に朱雀院の行幸あるべし。まひんなぞ
やんごとなき家のこどもも上達部殿上人ども
などもそれかたまつさぐしきは。これえら
をまへれば。こゝこゝちだ臣よりもじめて。とり
どりのざしどもなるひまふ口とまなし。山ざとびと
まもひさしうぞとづれた夜ハざりけるを。おぼし
出て。ふりまへつゝしたりかれば。そうげの遊事
のこゝろ。こちぬる月の廿日のほどなんなん。法ぬる
事なすしくこゝまへなして。をけんのごうつとなれ
どかるしひせまふ事などある後ミまふに。世中乃
よりなきも衣まうしろめたげませへりし人も

いかなるんおされさほどまよひやすらんこゝやす所(ごろ)は
とくれしてまゐりしなど。よろぐしかしはど
ちひいでゝあさかしぎとふしひまへり。お納(せうなごん)そゆへ
なからずれかへりなどきてしたり。いこなどすぎて
京のとのまなんときてゐへば。ほ(源)どへてこゝのうの
どうなる夜(よ)おりしたり。いとすごけまあれたる所(ところ)の
人ずくなるまいかまおさるさ人おそろしかるん
とこゝ。れいの所(ところ)まいれしてまゐりて。お納そ御(ミ)
ゆりさ夜などうちなきつくきてしゆゞくるまあい(源)
なうれ袖(そで)もしぐなしず。実(お御云詞 兵部卿之)まわししてまつらんと
ゆるゝ。こひ(紫ノ母)めぎみのいとなきけるくうきものま

おもひきてしまへりしまいとむげまちどなしぬ
よもひのまぶさかぐしう人のおもむけをもん
しり給はず。なりぞらなるれほどまて。あまるまれ
給なる中れ。あかつちしき人まてやまじ。ゆ給りん
なまど。すぐ給ぬるもよと。其ほおぼしなげきつるも。
しるきことおほく侍ほ。うくうつけるきなげのれ
ことの紫ハのちのれころもしどり。笑させず。いと
うれしうやひまへられぬべきおりふしより侍り
ながら。すてしもなずしひなるさ海ほまれしき海
いぎれらしよりもわりびてなしひしまへれど。いと
かるはしいてく侍ときこ由。なふかうくりへし

きこえし志しする心の程どをつゝしまゝふらん。その
いふかひなきはなりさ海のあれはゆしう覚え
しまゝふも契(ちぎ)りしとはなん。こゝろなぐらしひ志ら
れける。狂(なを)人ぼてなんできこえし志らせだや
あし(源)われ海(うら)にこゝろあはりくともこゝろ
なぐらへる波(なこ)は。めざましからんとのゝまへ。げ(お納言詞)は
こそいとかしこかれとて
よろなこの心も志しでわれ海(うら)にしまもな
びかんほどそうきこゝろ。わりなきことくきこゆる
さ海のなれこゝろ。すゝしつゝゆるされぬふ(源)なのぞ
こしぎらんとうちすじぬへるを。男に志しそわるさ

人ぐかもへり。君ハうへ（紫 尼）をよひきこしめて。なるさ
かしめへるに。此（ミ）何そびがうさどものなをしきる
人のおとすり。宴（兵ア口）のおとしますなめりと。聞（きこ）ゆれば。お（紫）
きいでゐて。お納（訂）てよ。なほしきりつゝんを。いづ
らこやのおとすりとて。よりおいしろ。此と思いと
らうしし。宴（源訂）にはあらねど。又おもほしいなるべう
もあらず。しらとのまゝを。（紫）ぐりしりし人とす
がまきくなして。何しういひてぐりとおぼして。
めのとまさしよりて。いざかし。あつるきまとのまへ
だ。いまさらなど。思（志の）びあつゝん。これひざれうへり
此どのごもれよ。いますうしよりまへとのこまへば

めれとのされば しそうよづゝぬれほどまてなん
とて どしよせしてまつりしれば なる心もなくね
しまへるまて（源）をさしいれてさぐりまへれば なるよく
うるうれぞよ うゑはつやくとうりて すゑのふさ
やうまさぐりつけれしるほど いとうけくしう
ひやしるてをとしへしまへれば うして（紫ん）例（れい）ならぬ
人のくちづきまへるはおそろしうて（訂）○なんと
いふもれをとて志のびてひきいりまふ（源）つきて
すべりいりて いまは（訂）まろぞおもふべき人なりとゝ
まひそとの給（素）めれといでなかうしてやゆく志う
も侍りれ さこしさせ志しせ給とも さしよなるよ力

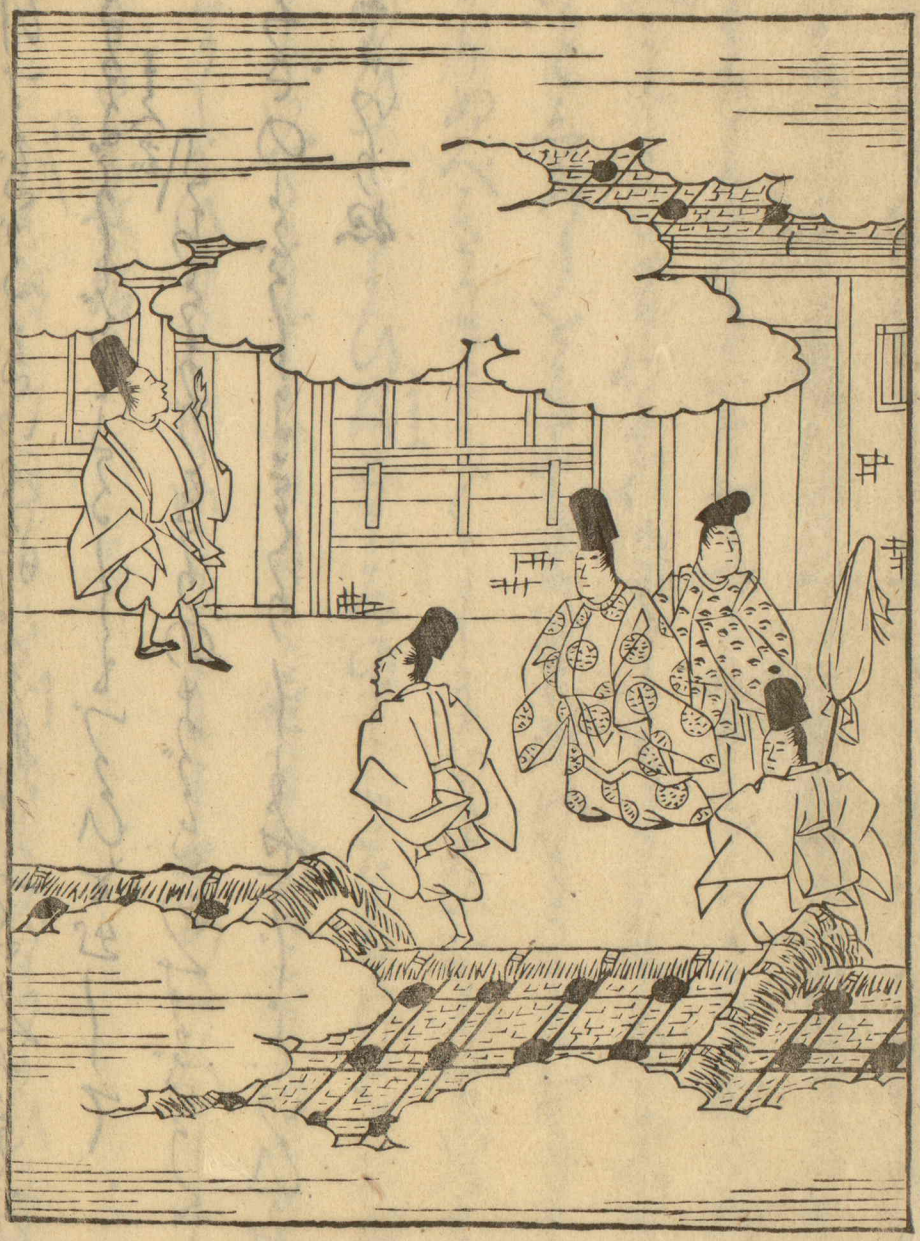
しうしも侍らじ把をとて、くるしげにしひられば、
さりともかゝる所ほどといかでもあらん、なほしらぬ
よりはしらぬ心ざしのかどをとゝてしるへとのまゝ
あられかりかれてすぐさよれさ夜なり、いかでかう
人ずくなる心ぼそくてすぐし給らんとうちかい
まていとゝすてがたき程なれば、こうしまいり
○、それおそろしさ夜のさ夜なめりをとの井ゞ人
まて侍らん、人ぐちうさふらはれようしとて、いと
なれがかる、み枕のうちまうさいぐさていりぬ人ぞ、
あや志うおもひの侍るもとあきれて、これもく
ねたり、めれとはうしろめたうわりなしとせんど、

あしまましうきこしさくぐべきなりねばうちなげ
きけるねたり。わ(紫)が君はいとおそろしう。いかるるんと
わるくれて。いとうけくしきれたぐつきもそぐろ
さむげるおぼしたる紙(源)らうたくおぼしたる。ひとへ
ぐりををしくくこそ。わが(三)れこちもかけいうこそ
おぼしのへど。衣(あれ)はうちかたしひのて。いざこまへよ。
おかしきゑなどおぼくひねかのそびなどする所(とろ)は
と。心はけくべきことをの給(まふ)けくひのいとなりか
しきに。お(紫)されきこちまもいといたうもをぢず。
さすがまむけりしうねもいしずおぼして。こどろき
めしのへり。地(地)ひとよ風ゆきあるくはげ(円女)まりうた

ちをざらましかば、いかにこころぼそからまし。おれ
じくはよろしき程(かど)におりしまさましかばと。さくめ
きかへり。めれとはうしろめたさに。いとちかうさふ
ふ風すこしふきやうるに。更ふかういでぬるも
とありがかなりや。いと(源氏)表(あれ)にこそまつる所あり
さ海を今(いま)はましてかた時(とき)のまもおぼつかなかるべし。
あけくれながめんとぐる所(ところ)にはうしこそまつらん。
かくてのこはいかに。もれをだしこ海をざりかり
とのゐへば。変(か納言)も所学へまなぎ四九(きこ)し給(まゐ)めれど。
これは四十九日(ちくなぬか)すぐしてやなどもひまゐるとさこ
ゆきばこれ(源氏)もしさすぢなかりしも。よそくまてか

らひまへるハおなじうしそうとう覚(おぼ)てまつめいま
よりこゝろてまつれどあさかゝぬ心ざしハまさりぬべ
くなんとてかいなぞつゝみりこがちまて出まひぬ
いこじうこさりわたれるそらもしぐなしぬ志もハ
いとしろうをさてまことのけさうもおうし
かりぬべきまさうぐしうおもひおとす いと志
のびてうまひ給(まゝ)ところのこちなりけるをおぼ
しいでゝうどうちたゝせまへどさてつゝみ人
なしかひなくてけともまこと思ある人して
うるさせ給
あ(源)さぼらけさりしけそらのまよひまも

りすぎがこさいもがかどかれとふるかんりうるひ
こるまよりしだゝこるしもづかひを出して
よしへ家
こちらまりこちりのまがきのすぎうくい
くさのとぎしまさんりしもせじといひけ
るいり也



まさ人もいでこねばかへるもなまけなれどあ
けゆく雲(そら)もそしこるくてどの(源)へおりぬおりしう
アとつる人のなぞりしひしくひとりゐこしつゝふし
こまへり日こうおほとのごもりおきてふこやり
なまかくべきことのそもれいなすねばふでうちをき
つすきひねまへりおりしき恩などをやアとまふ
うしこまはなふしも実(共ア)わたりこまへりとしごろ
よりもこよなうあれまきりひろうもれかりこる前(とこ)
のいとゞ人ずくなまさびしそれだこわたしまて
胡ろ前(とこ)にはいうでゝ志ぐしもおされき人のすぐ
し給ふんなをうしこまわたしこてまつりてん

なるの面をさほどまもあらず。めれとはさうじ
なぞ志てさつしひなん。紫ハわるき人ごなどあれば
もろともあそびて。いとようもれし給なんなど
のまふちうよびよせしてまつりまつるゝ。うの花
うつり香のいとじうえんにしきうへりまへれば。
おかしの花に目ひや。花ぞいいとなすべてとこゝ後
ぐるしげにおぼいたり。としどろもあげ志くさぶ
すぎまへる人にそひまへるより。時ごうしこゝに
わたりてこゝなりしたまへなどもれきしを。あや
しう字とこゝまて。人もころをくめりしをうゝ
おりましも抱し給たんも心ぐるしうなどのまへば

お帥会詞
なまかはこころぼそくともしぶしいくておりし
ましたなんずうしものゝ心おもほしたりなんまゐる
らせ給ひたんとそよくハ侍るべかれとこゝろ由ゝよう
紫ノ尼を
ひるしひこゝろしのふまゝそうさもれもきこし
めさずとてげ地いというおもやをのへれどいと
あてまうのくしくなりくこゝろ
音詞
なまかきしも
おぼす。いまはなまなき人のれこと無かひなし。
とのれあれだなどくこゝろひ四九(そこ)ゝてくるれば人
らせまふ後いと紫心ぼそしとおもひてないのへば。
音
こやもうちなきまゝて。いと詞ようしひないりのそ
かふあすわうしてまつらんなど。也こうしら人を

きて出ぬ。なぐりもるぐさめがこうなきぬ
へり。ゆくさき此男のあらんことなどまでもおぼ
し忘ぜらぐさしばこちとゐるゝおりなうまゐ
もしなしひて。今いなき人と如なりのひまけるとお
ぼすがいとじきなおさるきれこちなれど。むす
ほとふるがりてれいのやうにもあそび給ひずひる
もさてもまぎらし給をすぐれとなれだいと
じうくしのへだかくてはいでかすぐし給
ちんとなすぐさめまびてめれともなきあへり。
君のれもとよりいこれこゝ何をしてまつれの
へり。詞まつりくべきをうちよりめしあれがなん心

ぐるしうこゝそまつりしもさぶ心なくとてどの
ねべてまつれまへりあぢきなうもある（お納云付）（久）しこゝ
しれまてもものゝじめまこれはしとよ（兵ア）ゑさうし
めしつけばさふふ人ぐのをろかなるまぞさいるま
れんあかりしこものつゐでまいらけなくうち
いでさゝてしさせしまふなくどいふもそれ（紫）をいなる
ともおぼししらぬぞあさましきやお納てはこれ
こゝは（あれ）気なる物語（ぐち）どもしてありへてのちやさう
べきはすくきれぞ稱さゝしあらぬやうもあらん
しぐいまはかけてもいとまげなきはしとくこゝそ
まつりをとのやさうおぼしの給はすもいかなる

れ心にかゝるをもひよりかゝるなりこゝぞれ侍りけるにも宴
わたしせゐひてうしろやすくつゝうまつれ心おき
なくもてなしきこゝゆかなどの給はせつるもいと
わづらうしうこゝぞなりよりはかゝりれすきごともせひ
出されたべりつゝなどいひてこれ人もことあり
がかりや思給たんなどあいなかれいたうなげゝ
しげにもいひなさずこいふもいかなることにかゝあ
らんと心しかたうせふまいりてありさ夜など四九
かれぞあたれにおぼしやらるれどさてうちひ夜
たんもさすがにすぐろなる心ちしてうるぐしう
もてひがあたることに人もやもりさんなどつ

ましかれど、こぐむかへてんとおもほせ、れふこは
こびくこてまつれぬふ、つるれば例(れい)のこひふ(惟光)をぞ
こそまつれぬふ、さまつることぐもれありて、えまいり
こぬをどろかやなどなり、こや(音声 お納会詞)よりなすまいかな
れむかへまとの給ませしりつれど、こころあんこく
志くてなんどしどろのよもぎふをかれるんもさす
がに心ぼそう、さふふ人ぐもしひこぐれてとこと
ずくなるいひておさくあいしらなず、拙ぬひいと
るむけるひなど志(惟光)かれば、まいりぬ、こ(源)こゝハ大殿(おほとの)に
おりしけるに、れいの女(葵)君とこゝにもしいめんし給
ふず、もれむつしく笑(おが)しなて、あげまを(和琴)すがごきて、

ひしちは田をよそつくれといふうゑをよ恵を
いとなゝ夜めきてすきひゐまつり惟光まいりこれば源めし
よきて何りさ夜とひ給惟詞しかくなんとこゝゆれど
源ん くちおしうおぼして、かれ宇 寺 にやうりなば、わざと
むかへいでんもすきぐしうるべし、おさるまき人
をめすまいでこりともどきおひなん、そのさきは
しばし人にもくちがためて、やうしてんとおぼし
て源詞あかつきうしろまものをん、くる夜のさうぞく
さながら、ずいぢんひとりふたりおほをきこれと
のゐふ惟けれとりてこちぬ源ん、さこはいかにせまし、
さこしありてすきがましきやうなるべきこと、人の

程(ほど)ごは抱をせひたり。女の心かくしけることとし
とうられぬべくはよれつゝなり。ちくこやのしづね
いでたまへらんもりしるう。すぐろるるべきとと
覚(おぼ)しこごるれど。さてたげしてんはいとうら
おしかるべくれば。まゝ東ゐう出給(ぞまゐ)。女君(菱)れい乃
たぶくは心もとけずもれし給(源討)。うしこよいとまち
まこうべきことのたべるは。せひたまひ出てるん。
立(たち)かへりまつりこさなんとて出のへば。さふらぬ人ぐ
もたしざりかり。わがれるまてれなをしなどは
とてまいる。これこれぐりを馬(むま)のきておりしぬ。
門(ほど)うちたゝせのへば。心もたしぬものあけさうら

まれ車をやをらひきいれさせて、ちいふつまどを
なりしてしはぶけば、お納そこさしりて出きたり。
こゝまおりしますといへば、おさるまき人もれとの
ごもりてなんなどかいと衆ふりしちいでさせ
おへると、地のあなりとおもひていふ。あへわたらせ
おべかなるをそれさきまもれ一ことこさしさせを
かんとてなんとのおへば、なまごとまかはもべらん。
いかまもかぐしこされいらへこさしさせ治もむ
とてうちわらひてゐたり。こさしいりしまへば、いと
かゝはらいたくうちとけてあやしさふかぐどもの
侍かまとこさしさす。まづおどろかい治りしかいてれ

先さ雨しきてしんかうかなさざりをぐしてぐ
ぬうものかとていりたまへば・やともえさてしず・思ハ
なほ心もなくね治つるを・いざさおどろかし治ま
おどろきて・実の御むまへにおりしたがとしをひ
れておぼしたり・御ぐしうさつくろひなどし
まて・いざたまへ・実の御つかひまてまいりさつるぞと
のまつる・なしざりなりとあきれておそろしと
をひたれば・あか心うまろもおるじ人ぞとてうさい
どきていでまへば・大浦・お納てなど・こいかよと・宇
任・こくにはつまにもえまいらぬがおぼつかなれば・
心やすき所にとさてしを・心よくわたりまへか

なれば、まして、きこしがこうるべければ、人ひとりま
いれよりしとのこまへば、こころあれしこしく
て、ふいひとびんなくなん侍べさ、安のわたらせ
給えんなは、いかさ夜まりきこしやらん、それだから
ほどへてさうべきまおりしまさば、ともかうも侍り
なんといとおもひやりなきほどのことは侍れば
さつこふんどくるしう侍るべしとこさてゆきぶし
のらまも人はまいりなんかしとて、此車よをさせ
まへだ、あさましういかさ夜まりとせひあへり、わり
ぎもあやしくおぼしてないさまふ、お納そ此ぞ
どもひきさげて、ぞげりこもらろしさ衣きうへて

のりぬ。二条院（でうのゐん）もちかれば、まぐあうなしぬ。程（ほど）は
おもしてよしのこいはれくる海よりとておりぬ。
十（紫）ぶをばいとかるらかるに（源）さいぐさておろしぬ。
か納てなをいと夢（ゆめ）のうちしまぐるをいかに
し侍るべきとおかとてやすらへば、（源詞）そはこころ
なり。（紫）汁勇づからはわたしとてまつりつれば、かへり
なんとあらばをくりをんかしとの給ふ。（お紳会）ひて
おりぬ。はたかるあさましうむひもしげかるしず。安
のおぼしの給ふむしといかに（ゆう）なりてもべきはあり
さ海にかとてもかくても　これもしき人ぐにをれ
もつるがいうじさとせふに。（あうぐ）洞のとぐましぬをさす

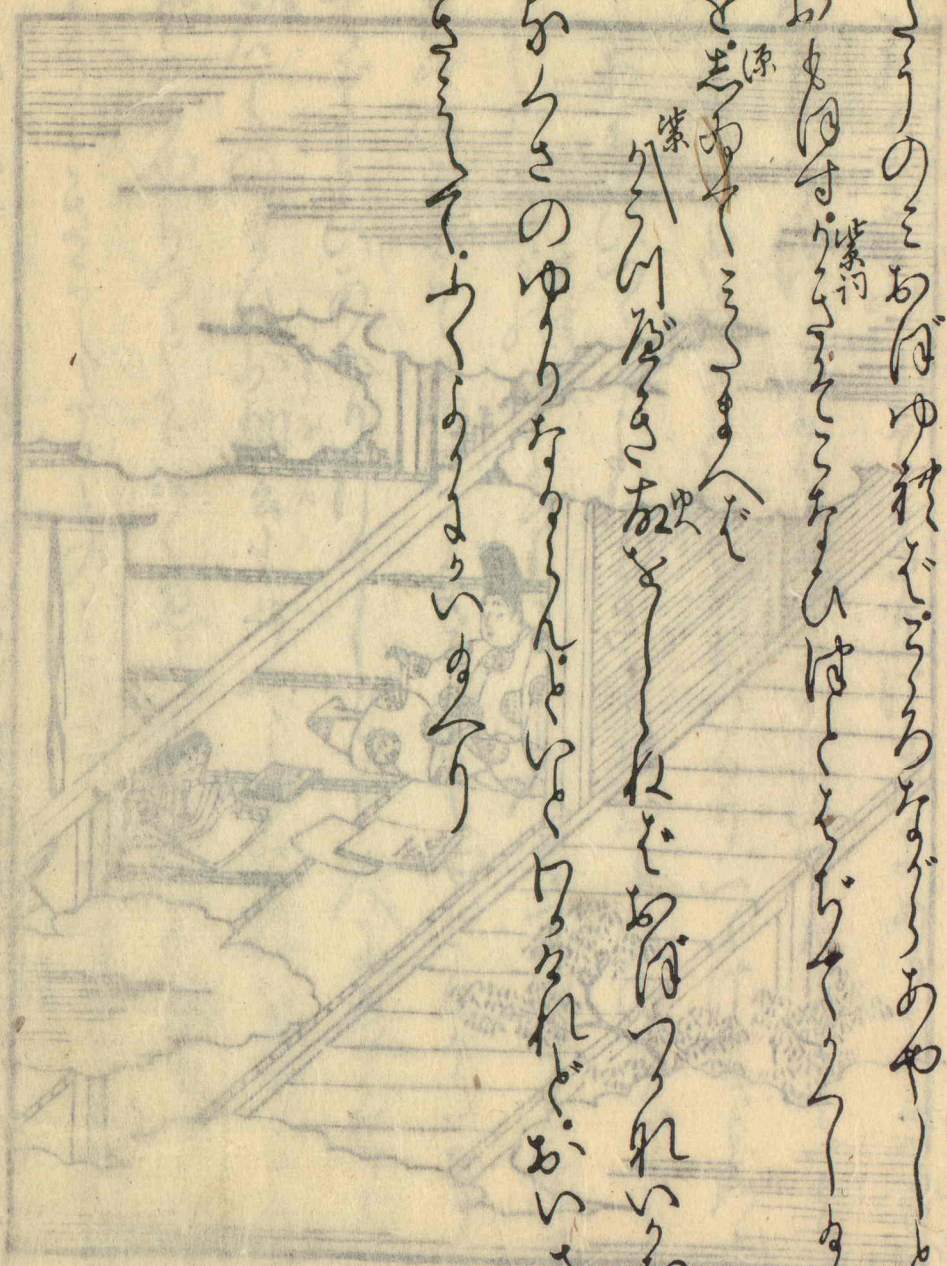
がよゆくしかれどもんじねたりとゐるはすこ
ゐるぬさいなれば此(ミ)様(ちやう)などもなりかりこれ(ほ)こ
めして此(ミ)様(ちやう)此屏風(びやうぶ)などあたり(あ)くしたるてさせまふ
此(ミ)事(ちやう)のうるびらひさおろしおましなどこびさ
つくろふぐらりまてあれどひんがしのういたり此
とのねもれめしまつかりしておほとれごもりぬ
わ(紫)ぎ君はいとむくつけういかますかことなりんと
おろくれたまへどさすがまこ思ふてもえなりさ給
くず。お納言が涙(もと)まねんとのまふこ思いとわりし。
いまは(源詞)さはおほとれごもりまじさぞよとをしへ
うさくしまへばいとまびしくてなきふしまへりめの

とはうちもみえれずもれもおぼしずるをおもしろく。
あすゆくまゝにまさるをば。おほやけ（かの納言）のつくりざまは
まうひざ後しまもいらず。（あか）のすがたもしまは
うきれさんやうなるてうやくうちすゝむ。
りさうくおもひぬれど。こゝろはなすなども
さるはざりたりぞとさまうらうとなぞのまゐり
おりみつのこゝとなりぬれば。おぼえどもずこゝろ次乃
とゐなりけり。（内侍）ぐくへむくあへりとさくべくこれ
なまじんおぼろげにはあくじとさきてめく。これ（源）てうけり。
これくゆなどいろへるまゝ。日たかりねおさまひて
人（源内）なくてあへるとさるべきへくゆふつけて

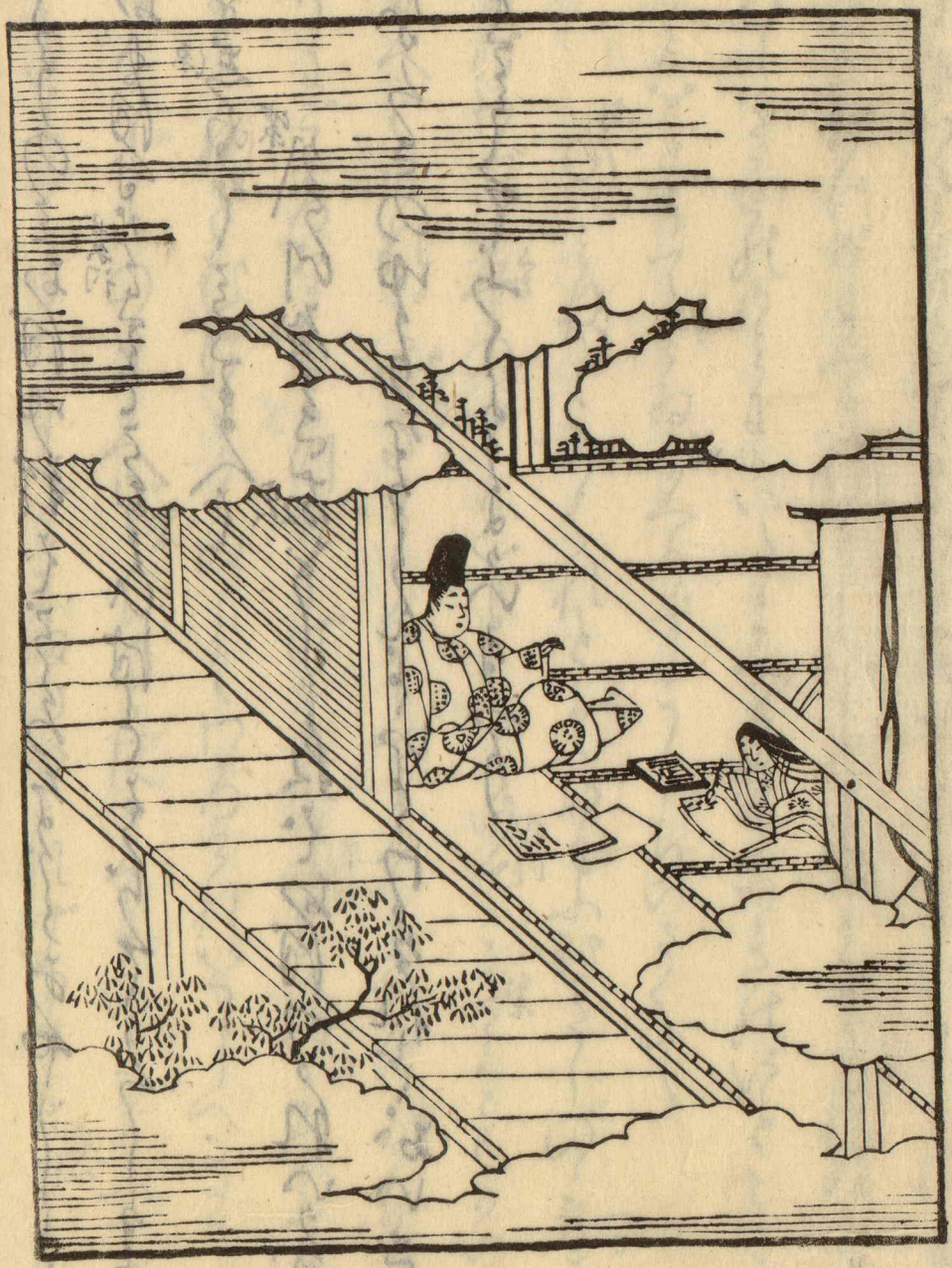
こそはむかへさせ給ひあとの給て。毎いまゝまゝ
めしまつらせ。ちいさきさかづきにさしまいれ
とありければ。いとおかしげにて。四人まいりたり。
紫ハ此ぞまゝとくれてかしのへるをもあそれ
うして。かうころうくかおくせそ。すぐろなるひと
もうちありなんや。女ハ心やましかるなんよさ
など。今よりをしへ。四人給。此かたちはさしもなれて
こしよりも。いうじうきのしまてなりけりうちち
かたひつ。おかしき絵あそびものもとりまれか
りてこせしてまつり。此こころまつくべきことども
をしのふやうしくおきゐてこ給ひ。まび殺乃

こゝ夜やかなるがうちなへしろ花をきてなるにぞろ
なくうち恵をなどしてゐ給へるがいとうけて
きるわれもうち恵まれてこゝまふひんがしのこいに
わたりのへるに立出てまはの末ぢち池のこゝなど
のぞきこゝまへは志もがれのお栽恵るかけるやうに
おもしろくてみもしらぬ四位又位こゝきまぎるひま
なういでいりつゝげるおりしき取りるとおぼし
此屏風どもなどいとおりしき恵をこつるぐさあ
ておはするもしろるしや。恵は二三日内へもまいるも
のとぞこれひと波なつけるしひきて給やうて
ほんにもとおぼするやてなしひ恵などさ夜ぐに

うきつゝこをこそまつり給いこじうおかしげる
うきあけめまへり。むさし野のといへばかこゝれぬと。
むしさゝれかこまかいこまへるすゝつきれいとこと
なるをとりてこゝねまへりすゝこしちいさくて
源 ひいこゝねどあくれとぞおもふむさしの。宿
まけわづら草のゆりをとありいで源詞 紫 ことかい
まへとなれど紫詞 まぐこようはかくずとてこなげ夏なが。
なまごろなくこけくしげなれば源 うらゆゝ思ふて。
詞 よかくねどむげまかくぬこそわろかれをしへこそ
えんかしとのこまへば紫 うらゝばこそかいこまふて
つきふでとりまへるさ海のおされげるかもら源 う



こうのこおばゆ積ぞころながらあやしと
おもほす（紫訂）うさてこなひはともだちてかくしまふ
と（源）志ゆてこうまへぞ
（紫）かくしばきあ（史）をしねぞおばつれいかな
かくさのゆりなるらんといとつかれどおいさ
きこしてふくよりまかいまへり



こあまぎみまぞまゐりけり。いまめかしきまれ
なるまゐ。いとよりかいこまひてんとこゝろまふ
ひゐゐゝど。わぎと。やどもつゝりつゞけて。もろ
まあそびつゝ。こゝまゐきもれおもひのまぎらは
しなり。かれとまゐるまゐし人ぐ。宮わたり給て
こゞ。きこゝ給けるまゐ。きこゝしやらんかたなく
てぞまびあへりけり。しぐし人まゐしせじと。
君ものまひ。お納言もせふことなれば。きちまゐち
がゝめやりつゝ。こゝゆく思もしらず。お納言がゐて
かしきこゝしこゝとのゝきこゝしさすゐ。こやも
いふかひなうおほして。こゝのまぎもかしこまゐり

給ふんことをいとも申しとおぼしたりしと
なれば、めれとのいとさしすぐしたる心ばせ乃あ
まりおいたるはわたさんをびんなしなどはいはで
心にまかせてゐてたゆたゆしつゝなありとなく
なくかへりゐぬ。もしきていでたてまつらばつげ
よとの給もまづらりしく。僧都(そうづ)の御誦(もと)にもたづる
きてしゐへどあとたるくてあたらしかりし
御かたちなどとひたくかれしとおぼす。きたのる
もなくぞ(紫ノ)をすてしとせひ罪(きこ)なけり心もうきて、
わが心にまかせはべうおもほしけるにたがひ
ぬるだ。ぐらおしうおぼしたり。やうく(紫ニ)人まいり

あつまりめ。琴あそびがてらこれよりはべらねども。
いとめづらしういまめかしき琴のりさ殿だちなれど
おもふことなくてあそびあへり。君はおとこぞこの
おそきずなどしてさうじくきさ夕暮などのびり
ぞ。あま君とひさしくおもひてうちなきなずし
しのへど。文をばしらずせいひぞこそしかず。おもと
よりこなすしひ聞え給ひでなすしひのへれば。今はこそ
これのちのおやをいとうむつびまつりし聞え給。
地よりおはすればおけりでむかひて哀ならふる
らひれふところはいりおそていさしかうとくとくげ
りともせひてずさうろゝはいにじうちうさき

わざなりけり。さうしら心ありなまくれとむ川ゥ
しきすぢまなりぬれば。わが心ちもすうしらぶふ
ふしも出くやと心をれ。人もうしゝがちまゝひの
外のことも。そのげゝ出くる後。いとおかしきもて
あそびなり。むすめなどいたゞくりまなりぬれ
ば。うろやすくうちふるまひ。べぞてなきさ海
まおきふしなどいえしもすまうじき後。これも
いとさ海かたりしるゝ。しづきくさなりとお
ぼいためり

69038
6AP78